

巻 頭 言

平成 14 年度技術室運営委員会委員長

関口 秀雄

国立大学法人化法案が閣議決定されたとの新聞記事が目にとまった。平成 16 年度法人化出発を前提として、ここ最近ずっと、自己点検評価や中期目標中期計画ワークシート等への対応に追われてきたような気がするが、やはり着実にスキームは前進しているのだとの感慨である。法人化しても大学の使命である知識の創造、共有および継承の重要性は揺らくことはないであろう。しかし、研究活動による知の創造、研究成果の速やかな社会への還元、教育実践を通じた知識体系の継承、いずれの活動においても、それを具現化するにはダイナミックで、かつ健全な技術基盤が一層求められよう。

たとえば、最近、研究業績を測る一つの目安として論文の被引用回数というものが登場してきたが、その背景には、コンピュータを駆使した系統的な論文データベースの目覚ましい整備がある。特定企業に依存せざるを得ないのは癪であるが、個人ベースではなかなか出来ない仕事であり、先見性があったことは認めざるを得ない。

研究業績のデータ管理についても意識改革が必要なようである。自己使用目的のために、一年単位で、個人毎に発表論文等の情報を蓄積することは習慣化している。しかし、研究組織体（たとえば防災研究所）を対象とした多様な研究力評価の要請に応じて、客観性のあるデータを効果的かつ速やかに提供し得るような研究業績データベース管理は、一朝一夕には出現しない。研究組織体挙げての戦略的な取り組みが不可欠である。

一般社会では、知識マネジメントの重要性が喧伝されている。大学においては、とりわけ知識創造に関わるデータベースの持続的な維持管理が重要である。私見であるが、防災研究所においても、知識マネジメント関連の研究支援に対する期待が飛躍的に増大していくように思われる。

平成 14 年度には 3 名の気鋭の技官の方が技術室に加わられた。平成 15 年度には、入倉所長、大平宇治地区事務部長、関係各位のご尽力により、2 名の技官の方を新規に任用し得るはこびとなった。いずれも、国立大学大学院工学系の修士号をお持ちの気鋭の技術者である。技術室活動がより活発となり、技術を通じた防災研究所のミッションへの貢献がさらに増進するものと期待している。

技術室の充実を目の当たりにするにつけ、技術室の相談役としての「技術室運営委員会」の役割はほぼ終えたのではないかと感ずるようになってきた。技術者諸氏の研鑽と service に応え得る技術室の将来像を責任を持って描くには、変化変動の激しい高度知識社会における研究者集団と技術者集団の相互関係の在り方を、真摯に、かつ大胆に検討することが必須である。まさに、防災研究所においてはそのような時期に来ているように感じる。

本委員会の任期も余すところ 1 ヶ月となったが、「技術室運営委員会」から「技術委員会（仮称）」への脱皮を検討課題の一つとして論点を整理し、次年度委員会に申し送りできればと考えている。

末筆となりましたが、平成 15 年 3 月 31 日をもって定年退官を迎えられます杉政和光技官ならびに永田敏治技官両氏の永年のご研鑽とご貢献に対して深甚なる敬意と感謝の意を表する次第です。ますますのご健勝をお祈り申し上げます。